

資料

中谷陽子教授のご退職に寄せて

中谷陽子・柳川高行

Material

Thanks Letters to Prof Nakatani Yoko with Happy Retirement

NAKATANI Yoko

YANAGAWA Takayuki

第1部 中谷先生に花束を

インタビューを受ける人 中谷陽子先生

インタビュアー 柳川高行

柳川：中谷先生、お別れするのは大変残念ですけれども、先生のご退職を感謝する文章を対談という形式で行なわせて頂きたいと存じます。

まず第一に、中谷先生は短大に何年間、大学に何年間お勤めになられたのでしょうか。

中谷：白鷗女子短大には、第1回生卒業の年に着任して12年。その後4年制大学創設に際し、経営学部へ4年、次いで法学部に12年、そして発達科学部／教育学部に7年と大学には23年、あわせて何と35年もの長い年月でした。

柳川：中谷先生がお辞めになると、古さだけでは、わたくしが上から3番目になります。短大は、私のルーツでもあり、色々な思い出が、それは沢山ございますが、中谷先生の短大時代の一番印象に残っていることをお話し下さい。

中谷：はじめはよくわからなかったのですが、短大が誕生するためには足利学園（中・高）が大変努力をされたこと、そして4年制の白鷗大学が発足するためには、短期大学が同じように努力をしたこと。このような縁の下の力持ち役がどの時代にもがんばっていたのだということがよくわかったことでしょうか。

柳川：中谷先生とおもちゃライブラリーの関係についてお聴きしたいのですが、おもちゃライブラリーの「必要性」をどのように上岡先生には説得して納得して頂いたのですか。

中谷：短期大学がスタートして10年目を迎えるにあたって、皆で力をあわせて、何か気概のあるところを見せようじゃないかということになりました。音頭取りは勿論上岡先生でした。専門ごとに共同研究

や新鋭の研究者による共同執筆など、幾つもの力作が揃いましたよね。私は、その少し前に世界の新しい流れとして、心の時代にあたたかさを持ち込むおもちゃ活動を大学が始めたらよいのではないかという提案を原稿用紙にかいて、まるで宿題か自由研究ノートを担任に出すような気持で提出してあったのですね。ある日、紙の角が日焼けしたそのレポートがポンと私の前に置かれて、「やってみるか」という思いがけないことばがとびこんできました。

柳川：おもちゃライブラリーの「開設の精神（ライブラリー・アイデンティティー）」をどのようにお考えだったのでしょうか。お教え下さい。

中谷：短大の何人もの先生方と知恵を出しあってスタートさせました。でも、とてもむずかしいことが長く私の心を苦しめました。幼児教育科のスタッフ皆さんの総意のバランスをとっての活動として、熟成させていくことのむずかしさでした。ただ、スタッフ皆の共通した思いは、“おもちゃがとても大切な文化財である”ということ、大学が率先して世の中に問いかけ、その気持を自信を持って広めていこうということでした。大学という力のある総体が、おもちゃの館をつくり、専門のスタッフを配し、地域の人々に開放し、そして何よりもその中ですぐれた幼児教育の若い専門家を育てること、つまり、教育と地域活動とそして研究が一体となって進んで行く時に、私達は昔から脈々と続いて来た“人とあそび”の本質に迫れると思いました。

柳川：そもそも先生と、おもちゃは、どのようにして「出会った」のでしょうか。お教え下さい。

中谷：勿論、皆様と同じように子ども時代に存分に遊んだからでしょうね。私は子ども時代を戦中、戦後の混乱の中で、東京ですごしましたが、家の中では、2人の兄にかわいがられていつも喜々と楽しく暮らしました。大箱いっぱいの積木を使って、くる日もくる日も玉の

塔（クーゲルバーン）と今でこそすばらしく名づけられています
が、つまり“ビー玉ころがしの巨大な暗渠”作りが私たち兄妹のあ
そびでした。いつも最後にビー玉をころがして出来工合を試す役目
を兄達は妹の私に与えてくれました。あと一点は、“ハノイの塔”
の子ども版が私の宝物でした。

戦後の上野の闇市で母が見つけた舶来品で、この2種の遊びは、現
代にも通ずるとび切り上等のおもちゃとあそびで、これが忘れがた
い出会いです。

柳川：中谷先生の障害児への関心と、おもちゃへの関心の関連性について
お話下さい。

中谷：心理学の中でも臨床分野へと引き込まれ、不満足感を満たすために
3才と5才の子連れでアメリカに勉強に出ました。20年以上の進
歩を誇るアメリカの臨床研究（子どもの分野）は、苦学な語学と苦
闘しながらでも、私に山のような収穫をもたらしました。学生時代
から障害といっても非常に難解なボーダー周辺の子どもの理解に
明け暮れ、今やっと日本の教育が取り組みはじめた軽度発達障害と
すでにその頃に出あうことが出来たのは、私の取り組みの方向づけ
を手にしたことになり、以来、障害というテーマは私の重要な課題
となって今日に至っております。

柳川：中谷先生が大学へ転籍されてから、一番思い出深いことは何でしょ
うか。

中谷：それは法学部に12年間在籍して、得たことあれこれです。人間が
自分をより知りながら生きていこうとする時、法学部に入りこんで
体験したことは、実に興味深いことが多く、それまで心理学とい
う、つかみどころに苦勞する分野に生きていた自分がものすごく曖
昧だったことに気づいて、それ以来心理的でありながらメリハリの
ある見方を目ざすようになりました。カウンセリングの進め方もと
てもわかり易くなった気がいたしました。余り頭脳のよい人間では

ないのですが、学生時代から法学部に進めばよかったかなーと思っただけです。

柳川：中谷先生の部屋には悩みを抱えた、若いカモメたちが時々訪れて白鷗大学のインフォーマルなカウンセリングルームの役割を果たしてこられました。そこにはうちのゼミ生も二人お世話になりましたが、先生ご自身の目から見て、真面目で誠実で心優しい学生ほど傷つき易いという、大学の現実をどのようにお考えでしょうか。

中谷：私の研究室は、柳川先生のおっしゃるほど質の高いカウンセリングを展開させていたわけではありません。というより、特徴のある場としての機能を求めていると言えるかもしれません。それは、キャンパスの中に在るということで、“育てる” 体質を重視しました。ひとつは、法学部特殊講義で「カウンセリング演習」という科目を開講させてもらい、「人の心に近づき寄り添い、人の苦しみを支援したい」と思う学生を育てました。Antenna9という活動グループが生まれ、今も多くの卒業生がそのメンバーであることを誇りにしながら、より精神的な日々を生きています。

もうひとつは、心破れてノックしてきた学生と本当にじっくりつき合い、その本人と2人で、協力して問題解決に挑戦していくことを試みました。自分で解決していく力を育てることを意識しながら学生とつき合いました。本当に心やさしい若者達が、試練の中でたくましく変っていくのを目にすると、“巣立ち” を感じます。

柳川：女性専門のクリニックの経営から、大学教員となられたある方は、本や講演の中で、ご自分の出会ったクライアントの話を沢山紹介しておられますが（そのこと自体は決して非難されることではありません）、これ以上他人の重荷を背負うことに疲れ果ててクリニックを閉めた、とも話されていました。

中谷先生にも、匿名の事例研究として発表できるだけの、悩み多い学生たちの生の声や、回復の過程に文字通り精通しておられるに

も拘わらず、全くそのようなことは為されていませんが、このことは、中谷先生の美学とはどのような関連性を持っているのかお話し下さい。

中谷：例えて申せば、小・中・高の学校の教員方の中に、ベテランになっても管理職コースを目ざすことなく、常に子ども達との学びに明け暮れしていきたいという方々がおられるように、私は学生達の苦しみを背負ってあげるのではなく、学生自身が自らを建て直してキャリアを積んで行く道を、一緒に歩むことで、学生を支えていきたいと考えています。もう何年にもなりますが、2人で効果的なカウンセリングを求めていった挙く、「星野・中谷式カウンセリングボード（板）」というのを考えた経緯があります。今も改訂案を出しあってボードの使い方をためしています。このことで元学生は落着いて自分と向き合うようになり、独りでも事をじっと分析するようになりましたね。

柳川：先生の「教育理念」と申しますか、大学教員はどんな教育をするべきだと先生はお考えですか。

中谷：大学の役目は学ぶ人達のニーズによって、実に様々ですから、一概には言いあわせません。高い目標を持って大学に進んできた人達には、物事を関連づけて考えていく体質を示していく事が役立つと思います。グローバル化した人間社会を、しっかりと見つめる力も養う必要がありますよね。私自身が大学及びその他の研究機関で教えられたことを振りかえりながら、やってきました。

柳川：こういう先生になってはいけないという先生は、小、中、高、大、を問わずどんなタイプの教員だとお考えですか。

中谷：教員の周囲に居る若い人達は、教員の一挙手一投足をよく見えています。興味があるのですが、そのように、じろじろ見られる教員は、幸せ者だと思いませんか？私は、若い人達を失望させるような生き方を決してしてはいけないと思いながら、白鷗大学での長い年

月を送ってきました。でも、ポーズすることも装うこともなく、自然体でしたね。年令差が親子ほど違っても、様々な事に共感し合えた思いが残りました。

柳川：先生の今後のご予定はどんなふうになっておられるのでしょうか。差し支えなければお教え下さい。

中谷：平凡です。勉強も仕事も何物にも縛られない暮らしは人生ではじめてです。楽しみにしています。出不精な私ですので…ご想像下さい。

柳川：先生は3人のお孫さんに恵まれましたが、祖母になられた感慨はどんなもののでしょうか。

中谷：人生で我子に続いて2度目の子育てに関われるというめぐりあわせは、幸せな事です。3世代家族が減少している時代ですので、仕事をする若い親達を少し助けてきたかな、と思っていますが、最近、孫が私の不足を助けてくれるようになりました。「すごいおばあさん（高齢のこと）になっても安心していていいよ」って、私の一番の気掛りをさらりと口に出してくれるのを聞いて、神様に感謝しています。

柳川：最後に白鷗大学の後輩教員達に、これだけは言っておきたいということをお話下さい。

中谷：母体の学園には歴史がありますが、栃木県小山市思川のほとりに誕生した小さな大学は、私の知る限りでは常に文部科学省に申請事業を提出し続けてきたと思います。その都度、私達は申請人事の条件を満たしていないと叱られ、発破をかけられて、不十分ではあっても研究業績を積むことに悩んできました。後輩の先生方、これが常に一歩前へ進もうとする私たちの大学に在籍する者の宿命ではないのでしょうか。白鷗大学の輝かしい将来を心から祈念してやみません。

最後に、先生方に心から御礼を申し上げて、長い間助けていただいた事への感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

第2部 中谷陽子先生へたくさんのありがとう

経営学部教授

柳川高行

1. 初対面と第一印象

「あなたも英語の先生ですか」と、あの包み込むような笑顔で、中谷先生が問い掛けられたのは、わたくしが、1977年10月1日に奉職した白鷗女子短大で、故上岡一嘉理事長兼学長から一番最初に、ご紹介された初対面の日のことでした。それからもう、あっという間に、34年が経ちました。

上岡先生がネイティブのリゾレット・フランツ先生とドゥーシー先生と一緒に、チームティーチングを水曜日と木曜日に行なっておられまして、時々中谷先生が上岡先生の代講をしておられて、これからの、わたくしへの、役割期待の一つが、中谷先生の替わりを勤めることだということが、その初対面時の挨拶の意味していたことだと少し経ってからわかりました。

10月の下旬からLL1、LL2、オーラル1、オーラル2、という四つの科目で、わたくしは、即時縮訳とでも呼べそうな仕事をし、3ヶ月ほどで何とかジャパニーズイングリッシュで英会話をこなせるようになりました。

3年ほど前に、総合研究所から助成金を頂いたFDの共同研究会で共同研究致しましたが、メンバーの一人である中谷先生は、研究報告の冒頭で、わたくしと、初対面の時に「優等生が先生になってはいけない。できない人の哀しみや苦しみを知っている、わたくしは、劣等生だから大丈夫いい先生になれます。」と申し上げたことを大変よく覚えていると、中谷先生はお話をされました。わたくしは、自分でも忘れていましたが、今でもその生意気な教育者信念は全く変わっていません。どんなに才能が乏しくても、30数年に渡り毎日コツコツと、愚直に勉強し続ければ、劣等生

であってもいつか花開く日が来ます。

その中谷先生に初めてお目にかかった時の第一印象は、「少し年の離れた、おやさしく、おきれいなお姉さんで、人間として信頼がおける誠実度100%の人」というものでしたが、その第一印象のイメージは今日でも強くなりこそすれ、全く変わっておりません。

2. 中谷先生の学問と実践

中谷先生は、心理学と言う大きな研究領域の中で、短大でも、大学に移られてからも、何種類からの心理学関連科目をご担当になられました。ライフワークは「障害児の研究と教育」で、終始一貫しておられました。中谷先生は、知的障害児、身体的障害児と、最近よく耳にするようになった発達障害（自閉症、学習障害、注意欠陥多動性障害などで、見えない障害とも言われていますが、子どもから大学生までに顕在化しています。）を研究するだけでなく、障害に苦しんでいる親や子どものカウンセリングを実践してこられました。患者の診察のできない医者が、医者とは言えないのと同様に、経営現場の課題や改善しなければならないことに助言がでない経営学者は、経営学を教える資格は無いと、わたくしは、感じているものですが、中谷先生も、研究室での文献研究と平行して、お知り合いになった当時、すでに東京の東村山市で、市からの委嘱を受けて、障害児の親と子のカウンセリングを実践しておられました。外国人研究者の学説を紹介することや、専門用語の解説することを、アカデミックだと思いこんでいる大学教員の中では、中谷先生と、わたくしとは、同じ異端児的なタイプの研究者なので、そのような実践をご存知無い方々からは、何をしているのか可視化されないの、なかなか理解されることは少ない、立ち位置を取って選んでおられたのでしょうか。

3. おもちゃライブラリーの創設とその自然な流れ

中谷先生は、上岡一嘉理事長兼学長に対して、熱心に粘り強くお願いを

し続けられ、1983年に日本の幼児教育の短大では、初めてのおもちゃライブラリーが設立され、初代館長になりました。世界中から、これは良いおもちゃと思われるものを、許された予算をやりくりしながら、自ら、おもちゃ問屋さんに足を運び、一つ一つご自分の目と手で確かめながら購入しておられました。

当時の中谷先生の考えておられた設立理念は、

- ①将来幼稚園や保育園で児童の身体的発達と知育の発達に役立つ、おもちゃかどうかを、見極める目と、遊ばせ方とを学生の身に付けさせ、幼児教育科の学生が、将来、職場で使える知識を与えようという教育上の理念です。
- ②普通の家庭では簡単には購入できない質の高い、おもちゃを大量にそろえて、地域に開かれたオープン・スペースに、健全児達とその親達と、障害児達とその親達とが、孤立感を解消し相互に交流し、ピア・カウンセリングを行なうコミュニティーとノーマライゼーション（統合保育）の場を提供すること。
- ③親達からの子育て相談、とりわけ障害児の親の悩みに、おもちゃを媒介にして、カウンセリングを行なうという理念

おもちゃという発達障害児に数や重さの概念を視覚化する教材を、障害児保育の中で使われたことが、中谷先生が基礎を築かれた、おもちゃライブラリーでの実践を、自然な流れとして必然化させたと、わたくしには、思われます。

中谷先生と、おもちゃライブラリーでの活動をサポートするボランティア学生のカモメの会とで、もう一つの中谷ゼミが開催されており、わたくしも、時々お邪魔しては差し入れを致しました。おもちゃライブラリーの発行する広報誌『おもちゃ』を読むことは、わたくしの、大きな楽しみでした。

全く何も無いという状況の中から、おもちゃライブラリーを立ち上げ、10年余り初代館長として活躍された中谷先生のご功績は、もっともっと、

高く評価されてしかるべきでしょう。

4. 教育玩具の共同研究

中谷先生が、少ない予算を遣り繰りしながら、おもちゃを少しずつ買い揃えていることを、もう少したくさん買えるように応援したいと思い、わたくしは、「教育玩具の経営学的・教育心理学的研究」という研究計画書を書いて、ビジネス開発研究所の研究助成金に応募し、無事採択され多額の研究費を賜わり共同で行なった研究は、大変楽しい思い出ですね。

中谷先生とご一緒に、東京のおもちゃ問屋さんを訪ね、先生がおもちゃを選んでおられるその脇で、わたくしは、問屋のご主人におもちゃビジネスの特徴や、日本のおもちゃ市場の特色や、そして教育玩具の現状と将来についてインタビューをさせて頂きまして、とても勉強になったインタビューでした。その研究成果の一部は、平成6年3月に、ビジネス開発研究所刊行の『白鷗ビジネスレビュー』第3巻第1号に「教育玩具の経営学的・教育心理学的研究」というタイトルの論文にまとめられています。

このような共同研究が可能となりましたのは、当時の初代研究所長桑原源次教授のご英断と後押しがあったからだ、心から感謝致しております。わたくしは、この論文の中で学校歴社会日本は、教育最重視社会なので、教育玩具に対する支出は、中間所得層以上の家庭では、今後一層増えるだろうという推測を行ない、ケーススタディで任天堂のテレビゲームを取り上げ、今後テレビゲームは教育玩具としての特質を持つようになるかもしれないと、その可能性を示唆しておりましたが、近年のニンテンドーWiiとニンテンドーDSは、完全に教育玩具的性格を持つようになっており、自分でも改めて、いい共同研究だったなと感慨を深くしております。

5. Psycho-Socio-Mentor としての中谷先生

経営組織論や心理学の世界には、「メンター (mentor)」という用語がありますが、メンターには、仕事上の悩みや相談事を、共に考え、共に解

決してくれる（共考と共解）career-support-mentoring と、仕事以外の悩みや苦しみを共考し、共解してくれる psycho-socio-mentoring との2つが区別されます。

中谷先生はわたくしにとり、かけがえの無い psycho-socio-mentoring の役割を引き受け続けて下さいました。就職直後の2年半は、研究室は頂けず、事務局に専用の机とイスと電話等を頂き、副学長の野口先生から「僕の研究室をいっしょに使ってもいいよ」と言って頂けたのは就職後半年してからでした。

1978年4月からは、英語科でのLLとオーラルの4科目と、4年制大学への編入希望学生に対する、単位にならない2科目、幼児教育科の昼と夜の英語6科目入れて全部で12科目を担当致しました。大変な幼教での英語を、わたくしに、やらせながら、英語科の先生たちは、わたくしは、上岡一嘉学長の秘書的な仕事をやっていたので、学長の依頼を先生方をお願いに行くと、「官房長官、今日は何の御用事ですか」と皮肉を言われ、色々な場面でいじめを受けました。

事務局では、高卒の婿養子の事務局長さんからも、コンプレックスの裏返しからでしょうか、露骨ないじめの数々を受けました。

論文を書いて提出しましたら、論集編集委員長から、「助手のお前が論文を出すのはまだまだ早い、生意気な奴だ。そんなに速く専任講師になりたいのか」と掲載を拒否されましたが、その時々の中谷先生に愚痴を聴いて頂き、中谷先生の笑顔に接すると、わたくしの悩みや傷心は軽やかに伸びやかになり何度も助けて頂きました。先生は傷ついた私の心に見えない包帯を巻いて下さいました。勤めて2年目に、附属高校に留学してきたフィリピンの二人の女子学生に、日本語を週一回教えるという事を半年やりましたが、その時中谷先生は、二人の学生と、わたくしとを、東京の高級なお好み焼き屋に誘って下さいました。慣れない仕事に苦悶している、わたくしを励まして下さったのでしよう。

職場での新しい仕事が増える度に、沢山の難問に出会いました（例え

ば、生花の本の英訳等)が、本当に面倒をおかけしてお知恵を拝借致しました。

わたくしは、去年までの3年間で目の手術を含め7回の入退院を繰り返して、このように大学にご迷惑ばかりかけていると、大学側から退職勧告(レッドカード)が出されるのではないだろうか心配している、わたくしのことを、中谷先生と船田先生とで、ファミレスにうちの奥さんと、わたくしを招待して下さり、「事務局長さんに聞いてみたけれどそんな退職勧告規定はないから、大丈夫安心して下さい。」とお二人から話して頂き、お二人の親切さと優しさは、涙溢れる思いで、ありがたくて胸が一杯になりました。

6. Yoko's Atelier を訪れる翼の折れたカモメ達

中谷先生の研究室をお訪ねすると、常に何人かの学生さんが、出入りしています。心に悩みを抱え、大学という戦場での闘いに、心の折れた、人一倍真面目で繊細で優しい学生達が、中谷先生を慕って様々な相談事を持ちこんで訪れていました。

中谷先生の優しさに包まれて、インディアンサマーの中で、心の日向ぼっこをさせてもらい、ひとときの安らぎを得て、また戦場へと戻っていきます。中谷先生は、一人一人の学生と真剣に誠実に、そしてソフトに優しい微笑と共に向き合い、一人一人の別々の未来航海図と一緒に、根気よく描いてあげていました。

なぜ、わたくしが、このような事を知っているのかと言えば、わたくしのゼミナールに2年生を3回やってから、入ゼミしてきたA君と4年生の時に2年間休学したB君がいて、A君の場合は東京の病院をご紹介下さり、中谷先生自ら病院まで付き添って行って下さいました。B君の場合は休学中に、day careに通う感覚で研究室を訪れて、同じ悩みに苦しむ仲間達と語り合う機会を得て、無事元気になり2年遅れですが、ちゃんと就職して元気にやっています。

中谷先生の研究室は、一部の学生にとっては必要欠くべからざる機能を果たしている「隠れたカレッジ・カウンセリング・ルーム」とでも言える、非公認の「大学内のオアシス」として今日まで人知れずひっそりと、地味な役割を果たしてこられました。本来備えておくべき学生支援のカウンセリング・ルームは、相談に行くのには回りから丸見えで、学生と普段の接触の無い公認のスクールカウンセラーの所へはなかなか行きにくいと思われまので、それに比べれば、中谷先生の研究室ははるかに相談に行きやすかったと思われま。

Yoko's Atelier は、大学からの退学者予備軍の学生達を retention するという大切な役割を果たしてまいりました。このことはもっと高く評価されてしかるべきでしょう。

昔話になりますが、10年以上前に、3年間に渡って教務委員会で、A委員長と副委員長のわたくしと、B先生とC先生との4人で、change agent（変革の仕掛け人）として会議で激論を戦わせ、導入教育の必要性を訴えましたが、ついに多数の教員からのコンセンサスを得られることなく叩き潰されました。わたくし達の提案した「導入教育」の最大の狙いは、学生が自分の顔や名前を覚えてくれて、自分に関心を持ってくれて、信頼関係を築くことが出来る教員を最低一人は学生に存在させ、キャリア・サポート・メンターとサイコ・ソシオ・メンターの二つの機能を果たすメンターを学生全員に作り、大学という急激なルールの変化を伴う組織体への適応障害を防ぐことが目指されておりました。だからこそ「必修化」するだけではなく、全ての教員達にメンターとなることを「義務付け」、大学内に沢山のオアシスを創ろうという趣旨でした。

7. 中谷家と柳川家のお付き合い

中谷先生のお宅にお電話を差し上げると、時々お嬢さんが出られます。その時わたくしの目には、短大の学園祭に中谷先生とご一緒にいらした、スカイブルーのパンタロン姿ですらりとした長身の、浅田真央さん似の美

少女の面影が鮮やかに甦ります。二人のお嬢さんは、子どもさんを持たれて中谷先生ご夫妻は、「ばあ」と「じい」と言う新しい役割を果たしておられます。

中谷先生の旦那様には、すかいらーくの社長インタビューの時には、仲介の労をとってくださり、すかいらーくの茅野社長との、わたくしの初めての大企業の社長のインタビューを行なうことが出来ました。このインタビューはその後続けて行なっている社長インタビューの中でも、確認したいことを全部確認できたという意味で非常に上手くいったインタビューで今でも教材として使っています。ご主人から頂いた御厚意に対しまして、今でも深い感謝の念を抱いています。

中谷先生には、結婚前のうちの奥さんとのデートの事をご相談し、女性が喜ぶ事や不愉快に感じる事はどんな事がレクチャーを受けました。その時に中谷先生が旦那様に車で電車を待っている時に「僕と結婚してくれなければ、今、目の前の線路に飛びこむぞ」という文字通り命賭けのプロポーズを受けたという話をされました。わたくしは、その事を伺って、「そうなのか、プロポーズは命を賭ける覚悟で行なわなければならないのだ」と認識を新たにしました。

わたくしどもの結婚式には、滅多にお召しにならない和服でご出席して下さい、中谷先生の優しさを改めて感じました。

我が家の二人の子どもが、高校1年の終わりからと、中学校2年生の半ばにそれぞれ陰湿ないじめに会い、相次いで不登校となった時、我が家はパニック状態になりました。わたくしと奥さんは、いじめ関係の本や引きこもりに関する本を随分たくさん読みました。その時にも、中谷先生は、我が家が抱えるあれこれの問題の相談相手になってくださいました。たまたま誕生日が中谷先生と同じ我が家の長男に、手紙を書いてくださり、心が軽くなるかもしれないと一冊の本も同封して下さいました。その長男も今は大学2年生になりました。娘も私立高校に進学し無事3年間殆ど休まず通い、4月からは大学生となります。

毎日大学と高校に通う二人を見送るわたくしどもは、その度に、本当によかったねと何度も何度も繰り返しています。

この不登校時代と、わたくしの何回もの入退院の時と、妻の入院手術の時もわたくしは、友達運に恵まれているとうちの奥さんが話していましたが、自治医大の今の主治医の草野英二副院長も高校時代のクラスメートであり、今年の2月の診断で、この分野の第一人者である彼から、「腎臓病になる心配は全くないよ」と断言して頂き、「僕の言う通りに治療していけば100才まで長生きできるよ」と励まして下さっていることに加え、中谷先生を始め、たくさんの雨の日の友と心優しい卒業生とがいることを実感しました。

中谷先生が大学を去られてからも、どうぞ柳川家とのご交誼を続けて下さいますよう改めてお希い申し上げます。

8. 春なのにサヨナラですね

中谷先生との34年間に渡る、職場でのご交誼は今年3月で一旦途絶えますが、中谷先生との友情は変わることなく続くことは間違いのないことだと確信致しております。

中谷先生の白鷗時代は、「顧みて恥じること無き大学人生活」でございました。中谷先生は、いくつものご病気を克服されながら、聖母（マドンナ）のように学生たちを見守り慈しんでこられました。恐らく歴代の白鷗の先生方の中では、最も学生の生きる力に心強いサポートをされたことと、中谷先生との出会いに救われた学生が沢山いたことと、拝察する次第です。本当に本当にお疲れ様でございました。

中谷先生は、ご自分のなさっていることを、conspicuous behaviorとしてアピールすることは一切なさいませんでしたので、多くの先生方はお気付きにならなかったでしょうが、わたくしは、深い敬意を抱き、自分でもあんな風に生きたいという role model の役割も果たして下さいました。

わたくしは、東京に時々取材に出かけたり、経営者の方々とその月一回の

中谷陽子教授のご退職に寄せて

勉強会がごございますので、時々先生のお宅に伺い「あんな時代もあったね」と笑って話せる時間をもてたらと希っております。

サヨナラは別れの言葉じゃ無くて、再び会うまでの「近い約束」です。そういう意味を込めて中谷先生にサヨナラと申し上げたく存じます。今後ともどうぞよろしくお付き合い下さいませ。

(付記)

第2部では柳川家と柳川個人のことという、わたくし事にかなり触れておりますが、中谷先生のお人柄を知る上で、柳川の一番良く知っているエピソードとして取り上げたものです。そのことを読者の皆様、とりわけ、本学の教職員の皆様にご海容の程を心よりお希い申し上げる次第です。

第2部では、薬師丸ひろ子さん、中島みゆきさん、柏原芳恵さん、小椋佳さん、岩崎宏美さん、ユーミンさん、中村あゆみさん、ドリカムさん、山口百恵さん達（順不同）の印象深い歌詞をほぼそのまま、あるいはかなり変えて使わせて頂きました。ここにそれを明記して、知的財産を使わせて頂いたことに深謝の微意を披瀝申し上げます。

(2011年2月14日作成)

(本学教育学部教授)

(本学経営学部教授)